「アブラハムのゲラル滞在」（創世記二〇章一～一八節）

1　ゲラルでの出来事

今日の聖書箇所は、このように始まります。

アブラハムは、そこからネゲブ地方へ移り、カデシュとシュルの間に住んだ。ゲラルに滞在していたとき・・・（一節）。

先週私どもは、創世記一九章によって、ソドム、ゴモラなど、カナンの低地の町々が滅んだことを聞いたところです。

ソドムの滅亡という神の裁きを目の当たりにして、アブラハムはその後、どんな思いの中で過ごしていたのでしょうか。聖書に言及はありませんが、それまで居たところを彼が離れたという事実は、ソドムの事件の、何らかの結果と受けとることができるように思います。

「そこから」の「そこ」とは、いままで住んでいた、天幕を張っていたマムレの樫の木のところ、ヘブロンです。

アブラハムはいまカナンの高地を離れ、南のほうに移っていきます。半農半牧の生活をしている者にとって、移牧は、もちろん特別のことではありません。次の生活の場所はゲラルという町です。

ゲラルは、ガザという現在もある町の、そのさらに南にあった町、のちのペリシテの国（二一・三四）に属します。

この場所でアブラハムは長く生活することになります。「滞在」とここにはありますが、むしろ寄留というべきです。そしてじつはイサクもここで誕生します。それは次の章です。二〇章と二一章はひとつづきです。

今日の箇所の出来事をはじめにざっと申し上げておきます。その上でポイントとなるところを取り上げることにします。

ゲラルで生活をはじめたアブラハムたち、おそらく千人規模の、相当目立った集団だったと思います。入ってこられた側、ゲラルの人たち、とくに王は注意深く動向を見守っていました。アブラハムのほうも、ひじょうに警戒しながら、町の郊外に天幕を張ったのです。

ひじょうに警戒しながらということが、ここでアブラハムをして、妻サラを、妹だと偽らせることになります。

アブラハムは妻サラのことを、「これはわたしの妹です」と言ったので、ゲラルの王アビメレクは使いをやってサラを召し入れた（二節）。

どこかで見たことのある光景です。そうです。創世記一二章から始まったアブラハム物語のはじまりのところ、アブラハム一族が、その時はまだ甥のロトも一緒でしたが、飢饉を逃れてエジプトに下ったことがありました（一二・一〇～二〇）。その時もアブラハムは妻のサラに妹だと言ってくれと頼んでいます。夫だと分かると、自分

は殺され妻が略奪される恐れがあるからというのです。サラは果たしてその美貌のゆえにエジプト王の宮廷に召し入れられます。

この辺までは、エジプトに下ったときと同じですが、エジプト王ファラオとゲラル王アビメレクのこの出来事に対する反応、対処の仕方、アブラハムとサラの取り扱いは違っています。

エジプトの場合、宮廷に疫病がはやり、ファラオはそれはサラを引き入れたためだと考え、アブラハムの偽りを非難し、彼を直ちに追放します。アビメレクの場合、ファラオの場合と大きく違うのは、神が夢の中で現れ、この神とのあいだで対話が交わされることです。アビメレクはその中で自分の正しさが認められます。その上で彼はアブラハムを呼んで問いただします。それに対して自らの非を認めたといってよいと思います。そこでアビメレクはサラを返します。また「羊、牛、男女の奴隷など」を与えたばかりでなく、彼の領土に自由に住まうことを許します。結果的にはアブラハムにはうまくいったのです。

2　アビメレク

以上が二〇章のあらましです。この中から今日は二つのことを取り上げたいと思います。一つは、ゲラル王アビメレク、異邦人である彼を、イスラエルの神がひじょうに寛大に取り扱っている、ある意味理性的に言葉を交わしているのですが、それはどういう意味かということです。もう一つ、ここでのアブラハムをどう理解したらよいかということです。

はじめにアビメレクです。

聖書は彼をペリシテの国の人（二一・三二、二六・一）、ペリシテ人の王としています。ともかく異邦人です。その意味で目を引くのは、イスラエルの神が夢の中でであれ異邦人に現れたことです。それどころか、彼、異邦人の王アビメレクのしたことを評価しているのです。

> その夜、夢の中でアビメレクに神が現れて言われた。「あなたは、召し入れた女のゆえに死ぬ。その女は夫のある身だ」。アビメレクは、まだ彼女に近づいていなかったので、「主よ、あなたは正しい者でも殺されるのですか。彼女が妹だと言ったのは、彼ではありませんか。また彼女自身も、『あの人はわたしの兄です』と言いました。わたしは、まったくやましい考えも不正な手段でもなくこの事をしたのです」と言った。神は夢の中でアビメレクに言われた。「わたしも、あなたが全くやましい考えでなしにこの事をしたことは知っている。だからわたしも、あなたがわたしに対して罪を犯すことのないように、彼女に触れさせなかったのだ」（三～六節）。

サラを召し入れたことを神がとがめたのに対して、アビメレクは、アブラハムとサラ本人たちが偽ったからだと言っています。アビメレクにはその心に何のやましさもないのです。

それをイスラエルの神、主が認めています。それこそ、イスラエルにおいてであろ

うと、他の宗教文化においてであろうと、どこでも通用すべき基準です。つまり良心的であることです。それを神は認めています。

アビメレクの正しさは、アブラハムによっても認められます。「どういうつもりでこんなことをしたのか」（一〇節）というアビメレクの問いに対し、アブラハムはこう答えています。

この土地には、神を畏れることが全くないので、私は妻のゆえに殺されると思ったのです。事実、彼女は、私の妹でもあるのです。わたしの父の娘ですが、母の娘ではないのです。それで、わたしの妻となったのです。かつて、神がわたしを父の家から離して、さすらいの旅に出されたとき、わたしは妻に、「わたしに尽くすと思って、どこへ行っても、わたしのことを、この人は兄ですと言ってくれないか」と頼んだのです（一一～一三節）。

アブラハムは率直に語っていると私は感じます。神を畏れることがここには全くないのではないか、妻のゆえに殺されるのではないか、その恐れは本当の気持ちだったのでしょう。しかしそれが間違いだったことが、いま話をしている当のアビメレクにおいて明らかです。とすれば、そのように想定して、妹と言わせた私は間違っていたと告白しているのと同じです。

アビメレクは、このアブラハムの言葉を、彼が自分の罪を認めたと受けとったのです。かつてエジプトのファラオから追放されたとき、そうした弁明もする機会も余裕もアブラハムにはありませんでした。アブラハムからは一言の言葉も発せられなかったのです。

ここでアブラハムの言葉を聞いたアビメレクはこれを受け入れ、神の指示通りサラを返すと共に、誤解が解かれ、新しい関係ができたことを喜んで贈り物をします（一四、一六節）。その中でアブラハムにとって重要なことは、そこに住む権利をえたことです。つまり、「この辺りはすべてわたしの領土です。好きな所にお住まいください」（一六節）というアビメレクの言葉があったことでした。神の約束の前進を私どももここに見てよいように思います。

3　預言者アブラハム

もう一つのことは、今日の箇所のアブラハムをどう理解したらよいのかということです。

先ほど、どこかで見たことのある光景として、アブラハムが妻サラを妹だと偽ったことを聞きました。現代の人間の感覚では、妻を妹と偽ることは、それだけでアウトのような気がします。

エジプト王ファラオに対してアブラハムが偽り、結局追放されたとき、アブラハムは内心反省したのではないかと、思っていたのですが、もう忘れたのか、またやってしまったのです。信仰の人アブラハム（ガラテヤ三・九）らしからぬことのようにも見えます。この点には、カルヴァンも厳しい評価を下しています（旧約註解）。神の言葉、神の命令には決然としてしたがっていくのに、神の助けを待つという点で、忍

耐し切れず、不正な手段に逃れていく、と。ここゲラルでも、恐れが、アブラハムを支配していたのです。見知らぬ土地で、寄留者として過ごしていくことの困難は小さくなかったからです。

一つ分からないのは、先に私どもは、一八章で、三人の御使いが来て、来年の今頃また来る、その時には、妻サラに男の子が生まれているという予告、約束を聞いています（一八・一〇）。ということは、ゲラルに向かった時点で、サラは身重になっていたのではなかったかということです。そのことを考えて、聖書も、「アビメレクは彼女に近づいていなかった」（四、六節）と断っておかなければならなかったのだと思いますが、そうであるなら、ますます、アブラハムの一連の行動は、まことに軽率であり、神の約束のことが少しでも頭にあっただろうか、問いたくもなります。ここでもアブラハムはサラを、いやそれ以上に、神の約束の実現を、危険にさらしているのです。

このアブラハムの罪は明らかです。エジプト王ファラオと対面していたときはそれははっきりしていませんでした。しかしここでは隠されていません。アブラハムもアビメレクの問いに答えた言葉において（一一～一三節）、自らの罪を認めているといってよいのです。先ほども触れたように、この土地には神の畏れがないと思った、それゆえ妻を妹と偽った、しかしその時こそ、恐れに捕らえられたその時こそ、神の助けを願い、求めるべきではなかったのではないでしょうか。

いずれにせよアビメレクが、アブラハムの言葉を受け入れ、贈り物をもって、友好と信頼の手を差し伸べてくれたとき、アブラハムは自らの愚かさと罪を恥じ入りつつも、それを凌駕していま新たな未来を切り開いて下さっている神の恵みを深く思ったに違いありません。

このような者が、いま、しかし他者のための執り成し手として用いられます。その欠点と限界にも拘わらず、神の救いをにない、また伝える者として、祝福をもたらす者として用いられます（ヴェスターマン）。

> アブラハムが神に祈ると、神はアビメレクとその妻、および侍女たちをいやされたので、再び子供を産むことができるようになった（一七節）。

なるほどアブラハムは、妻サラを妹と偽らせるというようなことを、二十数年も前のことと同じことをやってしまいます。同じことをくり返してしまう、ここに人間アブラハムがいます。

しかしもう一人のアブラハムのいることも、忘れてはなりません。彼は変わったのです。人は変わりうる。アブラハムも変わったのです。ここには、その罪と弱さをはっきり認め、そしてその罪と弱さにもかかわらず、預言者として、救いの、祝福の担い手として立てられている「信仰の人」アブラハム（ガラテヤ三・九）がいるのです。弱さと恐れになお捕らえられながら、それでも神の救いの担い手として用いられるアブラハム。イサクが生まれようとしています。いよいよアブラハムは、すべての民に祝福と救いをもたらす人として歩みつづけます。

（二〇二〇・九・二七）